

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値103円55銭をあっさり割り込み、2013年11月以来の100円割れとなり、一時99円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95円割れをもイメージする必要が出てきました。

95円水準は、2011年の安値から2015年の高値の61.8%戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、52週移動平均との乖離で見ると、6月24日につけた99円では約15%の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した2008年の下方乖離とほぼ同じ水準になりことから、過度な下がり過ぎの反動での短期的なドルの戻りも期待され、また日本のリコプターマネー政策への思惑が円の上値を抑える要因となっていることから、100円～110円のレンジ相場の継続が意識されてきました。

ただし、8月に入ってからのドルの戻りは非常に鈍く、上値の重さが際立ってきており、年末に向けてのドル安リスクが高まってきていることには注意が必要であり、日米に金融政策の行方を見極めたいところです。

ドル/円相場のトレード戦略

■ 短期展望

先週は、104円台でスタートしたものの浜田内閣官房参与の「FOMCの政策決定前であることから、9月日銀金融政策決定会合では追加緩和は行わない方がよい」との発言や日銀による総括検証は難航しているとの報道を受け、101円20銭まで円高が進みました。

その後、米国の早期利上げ観測が強まったことを受け103円台前半まで回復しましたが、ドルの上値は重く102円台で週を越えています。

今週は、日米の金融政策決定会合を翌週に控えて期待感からドルが底堅く推移しそうです。イベント通過までは、米国の利上げ期待、日銀の追加緩和期待は根強く残っており、101円台では投機筋のドル買戻し注文が増加し始めています。

しかし、米国の利上げに関しては見送られる可能性もあり、イベント前に積極的にドルを買い進む勢いも感じられません。

以上から、今週も先週同様102円~106円のレンジを想定しながらも、ドルの戻り売りのタイミングをうかがう戦略が有効と思われます。